

中欧2007年夏

渡辺 肇

倉敷芸術科学大学産業科学技術学部

(2007年10月10日 受理)

1) ベルリンの王宮再建決定

1237年にハーフェル河畔の現在のベルリン中心部にあたる寒村ケルンが初めて文書に現れ、この年がベルリンの起源とされる。1411年にはホーエンツォレルン家のニュルンベルク城伯フリードリッヒ6世がジグスメント王より辺境地ブランデンブルクを購入し、1415年にはブランデンブルク辺境伯に、1417年には神聖ローマ帝国の皇帝を選ぶ役目の選帝侯に任じられフリードリッヒ1世となる。1440年にその息子フリードリッヒ2世が寒村ケルン・ベルリンに居城を定める。それからベルリンの発展が開始される。従ってベルリンに王宮が建てられたのではなく王宮を中心としてベルリンが出来たのだと言われる。ホーエンツォレルン家はその後着実に勢力を増し、更にはドイツ騎士団長としてプロイセンで勢力を起した同じホーエンツォレルン家の一統の男系が絶えた機会に婚姻によりブランデンブルクのみならずプロイセンにまで領土を拡大した。1701年には神聖ローマ帝国皇帝から許可を取り付け帝国の版図外であるプロイセンに於ける国王と言う肩書を名乗るのを許された。ナポレオンの勃興により1806年に神聖ローマ帝国が解消されてからはドイツ諸国の中でそれまで皇帝を出していたハプスブルク家のオーストリアを凌駕する勢力になる。1866年には普墺戦争でオーストリアを破りドイツ諸国の覇者となる。1870年にはドイツ諸国統一によるドイツの強大化を恐れるフランスのナポレオン3世を普仏戦争で破り、1871年には占領中のパリ郊外ヴェルサイユ宮殿の鏡の間にオーストリアを除いたドイツ諸侯を集めプロイセン国王がドイツ皇帝に推戴される事になる。

ホーエンツォレルン家の勃興により1871年にはベルリンがドイツ帝国の首都となった訳であり、これ以後の帝国建設時代と呼ばれる時代にベルリンは大発展するのである。しかし3代目皇帝ヴィルヘルム2世の冒険主義的政策により1914年には第1次世界大戦に突入する。4年後の1918年には戦争反対のドイツ革命が発生しヴィルヘルム2世は中立国オランダに亡命しドイツ帝国も、それを構成したプロイセン王国を先頭としたドイツ諸国の君主制も崩壊する。共産主義者のカール・リープクネヒトが社会主義共和国の成立を宣言したのはプロイセン王宮のバルコニーからであった。1919年にかけて共産主義者と穏健派の実力闘争が続き王宮は革命派の根拠地となり反革命派が砲撃を加えたりし革命派は敗北し穏健派のヴァイマル共和国が成立するのである。内訌の間にカール・リープクネヒトはもう1人の指導者ローザ・ルクセンブルクと共に虐殺されるのである。

ヴァイマル共和国も実質的には10年しか持たず、1930年にはブリューニング内閣が成立し議会制民主主義は死滅する。1933年にはアドルフ・ヒトラーが帝国宰相に任ぜられ第3帝国が始まるのである。ヴェルサイユ条約の不公正さを主張しドイツの失地回復を目指したヒトラーは外交で当初目覚しい成果を得るがドイツを東西に分割したポーランド回廊をめぐり実力行使を開始した結果、遂には第2次世界大戦を惹起する事になる。結局は2正面作戦を取らざるを得なくなり敗戦となる。ベルリンは1943年末から米英空軍による連日の空襲で破壊されていくのであるが1945年にはソ連赤軍との地上戦の結果完膚なきまでに文字通り粉碎されてしまう。

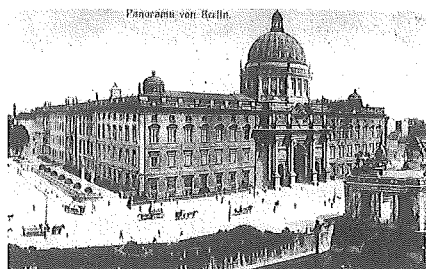


図1. ありし日のベルリン王宮

敗戦後のドイツは三つに分割される。西部ドイツは米英仏に占領される。中部ドイツはソ連の占領地区となる。東部ドイツはソ連とポーランドに割譲され数百年にわたり居住してきたドイツ人は追放されることになる。20区からなった首都ベルリンはソ連8区、アメリカ6区、イギリス4区、フランス2区に分割されて占領される。ベルリン発祥の地であり王宮が所在する中央区はソ連地区になった。王宮は破壊されてはいたが、外壁は残っていて再建する事も広島の大原爆ドームの様に保存する事も可能であった。第3帝国からソ連に亡命していたヴァルター・ウルブリヒトなどの共産主義者達も赤軍と共に帰国してくる。彼らがドイツ共産党(KPD)を再建しソ連占領地区の社会民主党(SPD)と合併し社会主義統一党(SED)を組織する。1949年の通貨改革を機とし東西対立が激化しドイツの占領地は米英仏地区とソ連地区に分裂する。前者に西独(BRD)が建国されると後者にも負けずに東独(DDR)が建国される。東独建国の立役者はウルブリヒトであった。翌1950年にウルブリヒトはドイツ・プロイセン軍国主義の象徴であり、ベルリン都心に残骸を晒す王宮をダイナマイトで爆破し、労働者農民が大デモンストレーションを行えるマルクス・エンゲルス広場を建設すると決定するのである。当時の東独政府の見積金額は王宮再建が3,200万東独マルク、王宮爆破が800万東独マルクであったそうである。それだけに今でも爆破を悔やむ意見が強い。爆破の工事には半年掛かる事となる。かくして、常にベルリンの中心であった王宮は姿を消したのであった。

1961年にはベルリンの壁が構築され東西ベルリンは完全に分離される事となる。但し外国人の東ベルリン訪問は東独通貨との強制交換を受容れば自由であった。筆者は1972年に初めて西ベルリンに滞在したのであるが、その際に東ベルリンを訪問しこのマルクス・エンゲルス広場をも訪ねたのである。実に索漠とした空

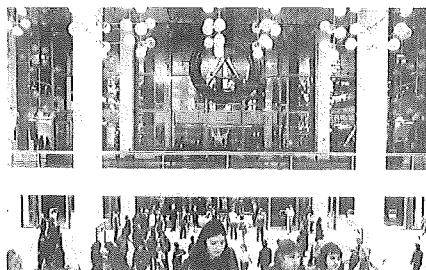


図2. ありし日の共和国宮殿内部

地だなどの印象を受けたのであった。戦後 30 年を経て経済再建もある程度進んでくると東独はマルクス・エンゲルス広場の一角に共和国宮殿と言う巨大な建物を建てる。1976 年の事である。その内部には議会を収容するのみならず東独国民の余暇の中心となるべく劇場や食堂やカフェー等をも収容し社会主義体制の優位を示そうとしたのであった。

1989 年にはベルリンの壁が崩壊する。1990 年 10 月 3 日には両独が統一される。その際に統一ドイツの首都をどこにするかが議論の的となった。戦後の西独が議会制民主主義を確立する事に成功したのだから暫定首都とされたボンを正式に首都にするべきではないのか。ベルリンは負のイメージが強すぎる。プロイセンの軍国主義、ヒトラーの第三帝国、戦後東独のスターリン主義がそれである。いや負のイメージだけではない。世界に誇るべきヴァイマル共和国の理念やヴァイマル文化の中心地はベルリンだったではないか。また他方には民族主義的郷愁があった。ドイツの首都は飽くまでベルリンなのだ。ボンが暫定首都であったのは統一ドイツが実現すればベルリンに首都を戻すと言う前提条件があったからだ。西独の東独併合と言う現実を踏まえれば旧東独国民が旧西独国民と摩擦無く融合する為には東独の真ん中にあるベルリンを首都にすべきだ等々の意見である。連邦議会での議論は激しいものであり、ベルリン派が破れても不思議ではない状況であった。各党派も党議拘束をかけずに各議員にその決を委ねたのであった。結局は 1991 年 6 月 20 日に僅差でベルリンと決定された。

統一後直ちに旧東独の外交官は全員が K G B のスパイであるとして追放されたが東独ナチオナルフォルクスアルマー国家人民軍の将兵は西独国防軍に、東独人民警察は西独警察に、東独国境警察は西独フンデスグレンツシュッツェ連邦国境警備隊に編入された。筆者は 1990 年 10 月 3 日の両独統一の直後にベルリンを訪れた事がある。旧東独の警官たちは西独警察とは異なった旧制服を着用していたが帽章だけは旧東独のものが外され西独の帽章がいやに目立っていた。警官たちからは明らかに無力感が漂っていた。共和国宮殿も直ちに閉鎖される。理由は建築材料として使用されたアスベストが危険だという事だった。しかしこれは言いがかりに近かったであろう。共和国宮殿への立入が禁止され、壁面を飾っていた巨大な東独の国章が外され虚ろになった。共和国宮殿は人間ではないから感情は示せないがベルリンの中心にあるこの建物から漂う虚無感は旧東独警官達に似ていた。

共和国宮殿は憐れな姿を 10 年以上に亘って衆目に晒されることになる。それは西独の東独に対する復讐であった。旧王宮の敷地の再開発については種々の議論があった。旧共和国宮殿を改築して再利用する案。旧王宮を再建する案。過去の束縛を脱し旧共和国宮殿でもなく、旧王宮でもなく、過去から隔絶した新しい建物を建設する案の三つである。2000 年にはベルリン市民の世論調査が行われる。王宮再建と言う意見が全く新しい建物を建てるという意見の 4 倍を占める。2002 年に連邦議会は王宮を再建する決議をした。しかし、予算措置は為されず旧共和国宮殿は尚も憐れな姿を晒し続けるのである。2004 年には遂に解体作業が始まる事になる。それと共に新築建物の設計コンペも始まった。2007 年

になってやっと具体的なコンセプトが決まった。旧王宮の跡地にフンボルト・フォーラムと言う名前で学術に資する事を目的として王宮を再建する事である。しかし、莫大な費用が掛かるので政府のみでは負担仕切れない。広く国民の寄付を求めているのである。

既に旧王宮再建の為の運動は開始されていた。王宮再建の決定もその運動なしにはあり得なかったであろう。王宮の外壁を復旧させるだけで8,000万ユーロ(約130億円)と見積もられている。それを全部寄付金で集める予定である。既に集まった募金の額は合計1400万ユーロでしかないとの事だ。実際の建設工事は2010年に開始され2015年10月3日の両独統一25周年に竣工させ大々的に祝う予定である。それまでに募金が集まるのだろうか、興味津々である。

ベルリンはドイツの中心部にあった。しかし第2次世界大戦で東部を失ってしまった後ではベルリンはドイツの東端に位置する。そのベルリンに首都を戻し、ある意味ではドイツ・プロイセン軍国主義のシンボルとも言えるベルリン王宮を幾多の議論の後に再建する決定をした事はドイツの民族意識が復活しつつある事の証左であろう。

2) ベルリンの首相官邸

今夏ベルリンを訪れた際に偶々政府庁舎、各省庁の一般公開日に遭遇した。私は首相官邸を訪問した。長い行列を予測したが毎年恒例の行事となっているのでそんなに待つ事も無く首相官邸に入れた。入り口でのボディ・チェックも空港で見られる程には厳しくなかった。外国人である私に対しても旅券の提示などは要求されなかった。公開されないフロアもあったがかなりの部分が見られた。メルケル首相もサービス精神旺盛に訪問者に対応していた。私も一言二言ではあったが話すことが出来、写真にサインを貰うことが出来た。日



図3. メルケル首相のサイン入り写真

本では考えられない事だ。日本政府も大いに見習うべきであろう。広大な庭も公開されていて空軍のヘリが1機、^{フランスポリツァイ}連邦警察のヘリが1機止まっていた。何れもメルケル首相が利用するものだという。そのヘリの中まで見物できたのには驚いた。間もなく2機のヘリは飛び立って行った。ドイツでは警察は各邦に属しており、連邦警察と言うのは聴いた事が無かった。警官に尋ねてみると、1977年にソマリア・モガデシオでのハイジャック人質救出作戦で有名^はを馳せた1951年創設の連邦国境警備隊が2005年に名称を変更したのだという事だった。つまり、2004年のポーランドとチェコのEU加盟によりドイツに国境を接する国は総てEU加盟国となり旧来の様な意味での国境警備は必要ではなくなった。それで改名したのだと言うのだ。

首相官邸を訪問した後は連邦大蔵省を訪問した。わざわざ連邦と付けるのは各邦にも大蔵省があるのでそれと区別する為だ。大蔵省を訪ねたのは筆者の専門が経済学であるから

だが、もう一つの理由があった。大蔵省の庁舎が歴史的に大きな意味を有するからだ。初代のドイツ皇帝の名を採ったヴィルヘルム通り 97 番地に位置する。東独時代には東独初代の首相の名を採ってオットー・グローテヴォール通りと呼ばれていたのだが、両独統一後直ちに旧来の名称に戻されたのだ。ドイツ帝国時代には 1816 年から 1919 年までプロイセン王国陸軍省が所在していた場所だ。その当時にはドイツ帝国陸軍省は存在しなかった。バイエルン、ザクセン、ヴュルテンブルク王国等が各自陸軍省を持っていたからだ。ちなみに戦時にはプロイセン王国参謀本部がドイツ帝国の参謀本部となる事になっていたのだ。

ドイツ帝国が崩壊しヴァイマル共和国が成立するが 1933 年にはヒトラーが政権を得て第 3 帝国が成立する。その時代にヒトラーに次ぐと言われた男がヘルマン・ゲーリングだ。ゲーリングは第 1 次大戦中には陸軍航空隊に属し、勇名をはせたりヒトホーフェン戦闘機隊の操縦士であった陸軍大尉だ。ナチスが政権を握ると敗戦直前に解任されるまで事実上ヒトラーに次ぐ地位にあった。ヴェルサイユ条約により空軍保有を禁止されていたドイツが再軍備を進めた際には空軍再建の立役者になり空軍と民間航空を管轄する航空大臣となった。1936 年に完成したその本拠地 ライヒスluftwaffenministerium 航空省を建設した地が以前のプロイセン王国陸軍省のあったこの場所だ。建物は 2,000 の部屋を有し第 3 帝国様式の壮大なものであった。ベルリンは米英空軍の空襲とソ連軍との市街戦により文字通り瓦礫の山と化したのに総統官邸の直ぐ近くにあったこの建物は奇跡的にほぼ無傷で残った。

戦後は先ずソ連赤軍の軍政部、1949 年の東独成立後は幾つかの省庁の共同庁舎となった。1953 年にスターリンが死去すると当時建設中であったスターリン大通りの社会主義的モニュメントの建物群で働く建設労働者達が労働ノルマの引き上げを不満としてこの建物に押寄せて流血の惨事となった。東ベルリンの労働者と民衆はソ連軍と東独政府に対し大暴動を起しソ連赤軍の戦車に蹂躪されて終息した大事件の起源となったのである。1961 年にはこの建物の直ぐ横にベルリンの壁が建設され東西ベルリンは完全に分断されるのである。筆者は 1972 年にこの建物を初めて見たのであるが当時の東独の建物がそうであったように外壁の手入れも十分には行われていず薄暗い感じの建物であった。1989 年にはベルリンの壁が崩壊し 1990 年に東独が西独に併合されると 8,000 の旧東独社会主義国営企業が民営化される事になる。その為に設立された トロイハントアンシャクト 信託機関が 1991 年より 1996 年までこの建物を本部とする。その初代総裁を務めたのがデトレフ・ローヴェッターであったが、彼は警察により厳重に警備されたデュセルドルフの自宅の書斎にいるところをドイツ赤軍派により遠距離から狙撃され暗殺される事となる。1999 年にはボンの連邦大蔵省がベルリンに移転しこの建物を本拠地とする際にデトレフ・ローヴェッター・ビルディングと名づけられるのである。

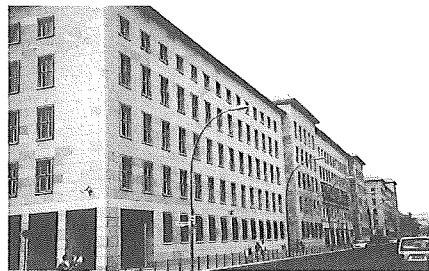


図 4. ドイツ連邦大蔵省

筆者は以前には国際金融の実務に従事していたので各国の大蔵省や中央銀行を訪問し大蔵大臣や中央銀行総裁に会う機会が多々あったが、西独政府は外国からの資金調達を必要としない国であったので、中央銀行たるドイツ連邦銀行は何度も訪ねる機会があったのに連邦大蔵省を訪ね大蔵大臣に会う機会は全く無かった。この機会を利用して大蔵大臣にも会い歴史的な意義を有するこの建物の隅々まで見てやろうと思った。残念ながら大蔵大臣の顔を見る事は出来なかったが大臣執務室の中を見る事は出来た。また、種々の部屋を見ることで第3帝国時代、東独時代の様々な出来事の推移を想像する事が出来た。また、連邦大蔵省の警備を担当していたのが首相官邸の様に連邦警察ではなく連邦大蔵省の管轄である武装税関吏であるのも面白かった。

3) ドレスデン再訪

1972年の9月に東独の4都市、ドレスデン、ライプティヒ、ヴァイマール、ポツダムを訪問した。丁度35年前となる。3泊4日の貧乏旅行だった。ドレスデンには朝から夕までの日帰り訪問だった。ドレスデン中央駅(Hbf)では無く、ドレスデン都心(Mitte)駅で降りて歩き、有名なツヴィンガー城の美術館を訪れた。戦災で破壊されたものが1965年に東独によって再建されてはいたが、何かと安っぽく、床に張られた寄木細工の本が妙に明るい色で、歩くときしむ音がしたように思う。今回再訪すると落ち着いた暗い色となっていて音もしなかった。35年経つと色も状態もこんなに変わりうるのかと思い、館員に聴いてみるとドイツ統一後の1992年に張替えたとの事だった。また、都心駅側から近づくと城の前に堀があり木橋で結ばれていた。この当時の橋は如何にもボロっちかった。今回は木橋ではあるがまともなものとなっていた。総てが変わっていた。変わっていないのはエルベ河だけだった。当時渡ったエルベ川に掛かるアウグストゥス橋を今回も渡ってみた。

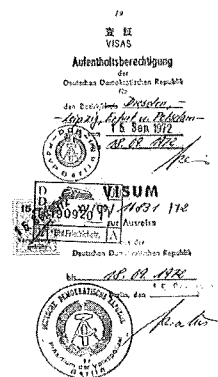


図5. 1972年の東独査証

当時のドレスデンは埃っぽくて汚かった。今回はしっとりした感じがした。1985年に再建された、ヴァーグナーの『彷徨えるオランダ人』、『タンホイザー』、リヒャルト・シュトラウスの『薔薇の騎士』等の初演で有名な、ゼンパー・オペラ劇場を訪ね、『カルメン』を見た。2006年に再建されたばかりの聖母教会も見物した。当時は総て廃墟であって、街全体が広島^{ひろしま}の原爆ドームの様であったのによくここまで見事にバロック建築群を再建したものだ。(広島、長崎と同じくドイツ降伏直前の1945年2月13日の大空襲で約3万5千人の非戦闘員が虐殺された。米英も酷い事をやったものだ。)この様にドレスデンの旧市街の核の復旧はかなり進んでいる。王宮の再建も残す部分は25%だけだ。しかし旧市街全体の再建はまだ完全に終了した訳ではない。聖母教会に接するノイ・マルクト広場の

ところに大きな空地がある。何年か前にドレーズデン市議会が音楽堂^{ゲヴァントハウス}建設を決め、設計案を公募した結果、超モダンな建物が出来ることになっていた。しかし、バロック建築の聖地の直ぐ横にこの様な建物を建てるのには反対だとの運動が起こり、市議会多数派のCDU（キリスト教民主同盟）が秘密裏に世論調査を実施した。筆者の滞在期間に結果が新聞にすっぱ抜かれ70%が反対との事で大騒ぎとなったので、この計画は消滅しそうである。いずれにしろ10年後には再びザクセンのフィレンツェと呼ばれたドレーズデンが完全復活する事となろう。

今回宿泊したホテルは中央駅の前にあり、東京で言えば銀座に当たるプラーガー通りに面していた。街は7分がた完成していたが、残りはまだ工事中であった。それでも昼間は非常に賑っていた。旧西独からの大手百貨店等も進出していて、旧西独の大都市の繁華街と比較しても遜色が無かった。その通りの真ん中で初老の男と青年が議論をしていた。初老の男は赤星に金の槌と鎌を付けたベレー帽を被り、右手で大きな赤旗を持ち、パンフレットやCDを販売していた。旧東独の政権党SED（社会主義統一党）は東独崩壊後PDS（民主社会党）と改称しスターリン主義との決別を宣言した。前回の総選挙からはSPD（社会民主党）左派の指導者であり元党首で元蔵相のラフォンテーヌと組んで『ノイエ・リンケ（新左翼）』という

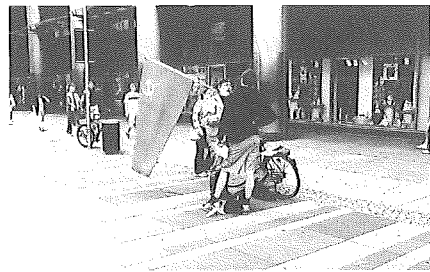


図6. 路上で議論する老人と若者

組織になっている。この初老の男はそれを良しとせず、昔のイデオロギーを貫徹しようとしている様だ。1人の若い男がそれに噛付いて議論となったのだ。しかしこの2人の議論に関心を向ける者は無く、みんな無視して通り過ぎて行った。共産主義は過去の物となっているようだ。社会に対する絶望感も小さくなって居る様だ。その証拠にドレーズデンでは電車の窓ガラスを削って落書きしたり、カラー・スプレーで落書きしたようなものは全く見なかった。その様な現象は両独統一後のベルリンでは本当に酷かった。それまでの信念が崩れ、若者が未来に絶望したことから生じたのであろう。ベルリンでは厳罰を課した事もかなり減っては来ているが、それでも絶滅にはまだ時間が掛かりそうであるのはドレーズデンとは好対照だ。

ドレーズデンはザクセン王国の首府であった。1918年のドイツ革命で最後の国王フリードリッヒ・アウグスト3世は退位し、1920年にはザクセン自由国の首都になった。東独時代の1952年にはザクセンは3県に分割されたのでドレーズデンはドレーズデン県だけの首府となった。共産政権が崩壊した東独末期の1990年に旧ザクセン自由国が復活しドイツ連邦共和国（西独）に加盟し、ドレーズデンはその首府に戻った。ドレーズデンは兎も角もザクセン全体としては若者のもやもやは納まっていない様だ。8月の下旬ある村邑での祭の夜に若者たちが大挙して印度人たちの経営する飲食店を襲撃し店を破壊して8人

の印度人を打擲し負傷させた事件が起きた。目撃者は居た筈なのに犯人は逮捕されなかった。これは民族意識昂揚の負の側面であろう。また旧東独地域の片田舎にまで印度人、支那人、朝鮮人、越南人が入り込んでいるのにも驚く。我国でも長瀬前法相が外国人単純労働者の導入に前向きであったのに鳩山新法相が否定的であるが移民導入に関しては大いに熟慮する必要がある。私がドレーズデンに入ったのはこの事件の直後であった。ドイツ人にとっては日本人も他のアジア人も区別がつかないので、日本人も外国人狩りの対象になったりする。筆者も興味津々であったので、ドレーズデンとその周辺を徘徊したが危険を感じた事は一度も無かった。もっとも筆者は酒を一滴も飲まないので酔払いが屯する様な場所には近づかなかった所為かもしれないが。

ドイツは両独統一後長く続いた不況を脱し、日本と同様に好況を満喫している。(日本と同様 2007 年の第 2 四半期には成長率が若干落ちてはいるが。) ドレーズデンも観光業が繁栄している様だ。街角の至る所で英仏西語等が聴かれた。日本人観光客もかなり見かけた。王宮横に有名な建築家シンケルが設計した近衛兵の衛兵所がある。今では観光案内所とカフェーとして用いられている。そこで昼食を摂った。料金は 11.3 ユーロであった。クレジットカード・カードで支払おうとした。13 ユーロとなっていた。心づけ分を含んで書いてきたのであろう。文句を言わずにサインはしたが、非常に不躰な行為であった。普通はクレジットカードの請求書には心づけの欄があり、客が金額を決めるのだ。旧社会主義諸国にも業務で頻繁に出張したことがあるが、商品経済が進んでいた旧ユーゴスラヴィアを除いて、タクシー代等でのいんちきを経験した事は無かった。特に旧東独に於いてはだ。それが後進国でよく経験する様な行為をドレーズデンで経験したのには驚いた。資本主義の悪しき影響であろう。

それでも経済の繁栄は旧東独地域にはその恩恵が及んでいない様だ。ザクセンでも庶民の金融機関である貯蓄銀行の邦の中央機関(日本で言えば信用金庫の県連の様なもの。但し営業基盤が県ではなく邦なので規模はずっと大きい。)ザクセン邦立銀行がアメリカのサブ・プライムローン問題の余波を受け経営不振に陥りバーデン・ヴュルテンブルク邦立銀行に救済合併されるとかで騒いでいた。日本でも金融機関破綻が相次いだのだが、その原因は結局のところ経済不振にあったのだから、旧東独地域の経済不振が完全に解消されるまで東西ドイツの経済格差は続くのであろう。流通産業での格差は殆んど無くなった様だが、45年間の社会主義経済の負の側面が解消されるのにはまだ若干の時間が掛かりそうである。

4) ローマ法王のウィーン訪問

ウィーン滞在中にローマ法王ベネディクト16世がオーストリアを2泊3日で訪問した。初日と3日目をウィーンでのミサ等にあて2日目は巡礼地マリアツェルの聖地建設850周年の大ミサにあてたのだ。法王は南ドイツバイエルンの出身である。バイエルンとオース

トリアは共に南ドイツに属し、方言もほぼ同じで宗教もカトリックである。法王は独逸の境界をなすザルツァハー川の直ぐ近くで育ったので戦時中も自転車に乗ってザルツブルクの音楽祭を訪問していたとの事だ。敗戦時はヒトラ^{ユーグント}ー少年団の一員として米軍の捕虜になり武装親衛隊員として捕虜になった作家のギンター・グラスと同じ収容所に入れられていたとグラスがその著書で述べている。法王になる前の枢機卿時代も休暇は殆んどオーストリアや南チロルで過ごしていたとの事でオーストリアには親近感が強く、里帰りの様な心境であった様だ。雨が降り非常に寒い天候であったのに、無神論者の筆者も1回目の野外ミサに参加した。オーストリアの信者のみならず、出身地であるドイツやバイエルンの旗は勿論のことカトリック国のポーランド、フランス、チェコ、スロヴァキア、スロヴェニア、ハンガリー、更には南米諸国の旗が目立った国際的なミサであった。傘もさせず無料で支給された合羽^{かっぱ}を被^{かが}って広場で礼拝をする人たちを見ると宗教の強さをひしひしと感じた。中でも筆者の傍でオーストリアの民族衣装を着て懸命に賛美歌を歌う如何にもゲルマン民族に見える敬虔な老夫妻を見ると何となく感動を覚えた。

その後も意識して待った訳ではなかったのだが、道路が閉鎖され横断が出来ず、結果的に法王の車列を2度待つ事になった。前任者のヨハネス・パウロ 23 世の暗殺未遂事件以後から使用されている全面が防弾ガラスで囲まれ誰もが法王を見える特殊車両^{ババモビル}が目前を通り過ぎた。不思議に思ったのは道路に沿って熱狂的に法王を歓迎する群集がそんなになくて、野外ミサ会場で見られた熱気が殆んど感じられなかった事だ。その後なじみの食堂に行きオーストリア人の給仕と話をすると、カトリック国のオーストリアであるにもかかわらず法王訪問反対のデモもあったと言う事だった。その話を聴いてから通りを歩いて行くと「法王帰れ!」と言うビラ^はが貼ってあるのに気付いた。無意識に歩けば見落とすものが知識を有すると見えて来るのだと改めて思った次第だ。社会を考察する場合も常に表だけを見るのではなく裏も見なければならないのだろう。



図7. 法王訪問反対のビラ

6) ハンガリーからのドイツ人追放

2004年にEUが拡大されオーストリアと国境を接するチェコ、スロヴァキア、ハンガリー等が新加盟国となった。これらの国との交流を拡大する為にオーストリア国鉄はこれらの国のオーストリア国境に近い都市への料金を大幅に割引している。ウィーンからブダペストに向



図8. ドイツ人追放追憶碑

かう際のハンガリー側の最初の駅がヘゲシャロムだ。更に2つ行った駅モソンマジャロ

ヴァールはウィーンから1時間20分程だがそこまでの往復料金は9ユーロ(1,500円弱)に抑えられている。

このあたりはブルゲンラントという地域でありハプスブルク帝国時代はハンガリー領でハンガリー人とドイツ人が混住していたのであるが、1920年になされた住民投票の結果ハンガリー領とオーストリア領に分割されたところである。しかし、国境で2分されたとは言え2民族の混住はそのまま続いたのである。第2次大戦後に数百年にわたり居住してきた千数百万人のドイツ人がズデーテンラントや東プロイセン等から追放された事は良く知られた事実であるが、ハンガリーからも追放された事実は余り知られていない。しかし、ドイツ敗戦から1年後の1946年5月10日にこの地域のドイツ人たちも追放されたのである。このドイツ人追放から60周年となった昨2006年にヘゲシャロム駅前にドイツ人追放60周年追憶碑が建設された。その碑には「我らがドイツ人同胞を追放してしてから60年を迎えたのを追憶して」とある。ドイツの民族意識が着々と復活しつつある事とハンガリー人の贖罪意識がこの様な追憶碑の建設を可能としたのであろう。チェコ、スロヴァキア、ポーランド、ロシアにもこの様な碑が建てられる日が来るのであろうか。ユーゴスラヴィア内戦の際にも民族浄化と言う事が盛んに報道されたのであるが、数百年にわたって可能であった民族共存がかくも簡単に崩壊してしまった事実をよく分析して未来において繰返される事のない様によく反省する必要があるのだろう。

ヘゲシャロムにはドイツ人追放追憶碑以外には見るべきものは余り無かった。それで更に2駅を6分ほど鉄道で進んでモソンマジャロヴァールに到着した。この街はオーストリア国境にもスロヴァキア国境にも16kmの距離にある。駅前には何も無くハンガリー語が話せない筆者は一瞬途方に暮れたが幸いにして市街地図が掲示されていたので1km少々を歩いて市街地に向かった。もう一つの問題があった。私はハンガリー通貨のフォリントを所持していなかったのだ。出発駅のウィーン南駅で両替しようとしたのであるが、信じられない事に両替所の銀行は日曜日で閉鎖されていたからだ。1972年にウィーンから鉄道でモスクワに向かった際に国境でソ連の税関に苛められ時間が非常に長くなりループルとの両替の時間が無くなった。2泊3日の旅であったのだが食堂車で食事をしようとした際に外貨での支払を拒否された。殆んど総ての連中が闇ドルを買いたいと近づいてきたソ連に於いてである。ブラチスラヴァから乗車してきたチェコスロヴァキアの学生達が同情して食堂車で^{おご}の食事を奢ってくれた。彼等がキエフで下車する前に更にモスクワに向かう筆者の為にみんなで食事費をカンパしてくれた。1968年のソ連軍を中心とするワルシャワ条約軍のチェコスロヴァキア進駐から間もない時であったのでソ連に対する憎しみが筆者に対する同情に代わったのであろう。そんな事を思い出したが最悪の場合でも昼飯を抜いたらいいや、夕食はウィーンで摂れば餓死にする事はないんだからとぶらぶら街に向かって歩いていったのだ。

街の中心地に到着すると日曜日のため人通りは殆んど無かったが、町並みはオーストリ

アの田舎町と余り変りは無かった。気がついたのはドイツ語が氾濫している事であった。歯医者、薬局、釣具店、骨董品店、食堂等の看板にはハンガリー語とドイツ語とが併記されていた。またハプスブルク帝国の事実上の最後の皇帝フランツ・ヨーゼフ 1 世の絵を用いた看板が目についた。ブルゲンラントとスロヴァキアはハンガリー領であったがハンガリー人、ドイツ人、スロヴァキア人、ユダヤ人が混住していた。スロヴァキアの首都ブラチスラヴァにはスロヴァキア語、ハンガリー語、ドイツ語の 3 ケ国語で書かれた薬局の看板が目抜き通りに残っている。ハンガリーの有名なユダヤ人経済学者コルナイもその自伝の中で当時この地域では 3 ケ国語を操るのが普通であったと書いている。スロヴァキア語こそ書かれて

いなかったがハプスブルク帝国時代に戻った様な気がしたのである。歯の治療費とか薬価がハンガリー領内ではオーストリア領内よりもかなり^{やす}安いので多分大勢の人が国境を越えて来るのであろう。腹も減ってきたので看板にドイツ語も併記されているレストランに入った。給仕にドイツ語で話しかけたが理解して貰えない。昔、チェコスロヴァキアとかハンガリーを資金貸付の為に訪問していたころ戦後世代はドイツ語を理解しないのもっぱら英語を使用したものだった。朝鮮や台湾の若い世代が日本語を理解しないのと同じ事だ。意思の疎通が出来なくて困っていると奥からコックが出て来た。彼はドイツ語を解したのでハンガリー通貨を所持してないがユーロで払ってもよいかと訪ねると勿論 OK だと言う。ハンガリー料理を楽しんで勘定を頼むと 1,200 フォリントでユーロでは 4.8 ユーロ (約 800 円) だと言う。為替レートが有利なのか不利なのかは分からなかったが非常に廉価なので 5 ユーロ払って外へでるとコックがわざわざ玄関まで出てきて見送ってくれた。



図9. ハンガリー語とドイツ語で書かれた歯科医の看板

7) 結語

中欧諸国を訪問して実感したのはドイツの民族意識が着々と復活しつつある事だ。第2次世界大戦の敗北により諸悪の根源とされ何等の反論を為す事も許されなかったドイツが静かに、しかし着実に民族意識を回復しつつある。シュレーダー政権が2003年のイラク侵攻への参加拒否をした事がその契機となったのであろう。世界的にいえば世界帝国としてのアメリカの勢力が凋落しつつある事の裏返しであるのかも知れない。7月の参議院選挙で勝利した民主党の小沢党首が本来的には右翼であるにもかかわらず海上自衛隊によるインド洋での給油活動を拒否するのも対米盲従を脱して民族の矜持を復活しようする意識の発現であるのかもしれない。ドイツのみならず日本においても民族意識が強化される傾向にあるのは、要するにアメリカの衰退を現しているのだ。^{おこ}驕れるものも久しからずと言う事だ。

Central European Summer 2007

Hajimu WATANABE

College of Science and Industrial Technology

Kurashiki University of Science and the Arts,

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashikishi, Okayama, 712-8505 Japan

(Received October 10, 2007)

The reconstruction of the former Prussian Royal Palace in Berlin was recently determined. The completion of the building is scheduled for 2015 commemorating the 25th anniversary of the re-unification of Germany. The palace had been heavily damaged at the end of the Second World War and demolished in 1950 by the East-German leader Walter Ulbricht in order to establish Marx-Engels Square where large demonstrations of workers and peasants could take place. At some parts of the Square the Palace of the Republic was constructed as a proud monument of the German Democratic Republic (East Germany) in 1976. When East Germany was merged into the German Federal Republic (West Germany) in 1990, the Palace of the Republic was closed and kept unused.

There were several arguments as to how the Square and the Palace should be used for the nation. Should the building of the Palace of the Republic be reused after some improvements? Should the former Prussian Royal Palace be restored? Or, should a building entirely different from both the Palace of the Republic and the Royal Palace be built?

After more than 10 years of difficult discussion, it was finally decided to re-establish the Royal Palace. This likely signifies that the pride and, to some extent, the nationalism of the German nation have been retrieved.

References

- 1) Carl Georg Böhme und Kristian Ludwig, *Das Stadtschloss*, Berlin, 1998
- 2) A. Holland, M. Schnurbus, K. M. Walter, *Das Berliner Schloss*, Berlin, 2004
- 3) Guido Brendgens, Norbert König, *Berlin Architektur*, Berlin, 2003
- 4) Arnt Cobbers, *Abgerissen !*, Berlin, 2007
- 5) Matthias Donath, *Architekturführer Berlin 1933-1945*, Berlin, 2005
- 6) Förderverein Berliner Schloss, *Berliner Extrablatt 47. Auflage, Nr.5/2007*, Hamburg
- 7) Petra Dubliski, *Berlin, 8.aktualisierte Auflage*, Köln, 2000
- 8) Frank Schüttig, *Dresden, Komplett aktualisierte Auflage 2006/2007*, München, 2005
- 9) *Kurier Sonntag Spezial*, 2. September, 2007, *Der Papst kommt*, Wien, 2007